生命健康科学研究所紀要、第１９号の発刊によせて

生命健康科学研究所 所長　　鶴留雅人

生命健康科学研究所紀要（第１９号）の発刊に際し、研究所所長としてご挨拶を申し上げます。本研究所は２００４年６月に生命健康科学部の設置に先立って設置され、学部創設の生みの親として機能しました。その後、研究所がこれまで様々な紆余曲折を経ながら継続・発展してきたことは、ひとえに多くの先生や大学関係者の皆様のご尽力、ご協力の賜物と、心より感謝申し上げます。現在、中部大学の８０年史編纂事業が進められておりますが、その中で、設置以降の歩みが紹介されることと思います。

本研究所は、病気を予知･予防して健康･長寿を享受しながら「人生」を全うできるような生活を目指した「21 世紀の健康を科学する研究所」として活動を進めて参りました。超高齢化社会を迎えつつある現在、「よりよく生きる」ことのできる社会を実現するために、ライフサイエンスに立脚した新しい開発型科学技術の創成を目指しております。

生命健康をサイエンスの対象とする本研究所には、IT 技術の進展を基盤にした AI の診断・治療への応用やビッグデータの活用法の開発、ゲノム医療の本格化への参画法、ゲノム編集技術の応用法の検討など、不可避の課題が山積しています。現在、国民の半分が罹患する悪性腫瘍や、着実に増える認知症などの神経･精神疾患、糖尿病などの生活習慣病や新興･再興感染症など、様々な疾病の発症・進展機構の解明、予防と治療法の開発、看護と介護のための新たな医療・看護技術等やリハビリテーション科学の開発研究および教育システムの確立のために邁進しています。

本研究所の使命は、大学院(生命健康科学研究科)の教員および大学院生の研究力の向上のための拠点となることですが、現在、本研究所は４つの研究部門(保健看護、メディカルエンジニヤリング、一次予防教育、ヘルスサイエンス)をその活動単位とし、大学院における創造的、先進的基礎研究をリードする役割を担っています。またこの過程で、 生命健康科学部６学科(生命医科学、保健看護学、理学療法学、作業療法学、臨床工学、スポーツ保健医療学)の研究分野間の共同研究や各研究分野独自の研究を推進し、その成果の発信を促進することにより、人々の健康や QOL の向上に貢献することを使命としています。とくに大学院生の研究と生活の支援は、「大学院教育委員会」的立場で教員と院生が協議できる場が存在しない現状においては、それに代わる貴重な使命を担っているものと認識しております。しかしながら、大学院の充実を目指すにはあまりにも厳しい昨今の社会状況と大学の現状があります。実際、大学院に入学し、研究を主たる活動として励むことが可能な学生数が極めて少なく、その事態はさらに悪化していることを実感します。この現状を改善し、研究したい者が十分に研究できる環境の整備に尽力することが、研究所の役割として最も重要なものと考えます。

本研究所では、これまでに二つの大型企画が文科省等により採用され、大型研究プロジェ

クトとして展開されました。まず、平成 20 年に文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択された『生活環境因子誘発性疾患の予知･予防に関する戦略的研究』であり、その内容は今も独立した研究部門“ヘルスサイエンスヒルズ”として展開中です。ここでは、慢性炎症の遷延から難治疾患への進展過程の解明と先制予防に焦点化して、平成 28 年度から始まった Branding 事業に対して平成 30 年度の研究提案を行いました。もう一つは、平成 25 年度に採択された文部科学省「地（知）の拠点整備事業（大学 COC 事業)」の一環、「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」です。ここでは、本学と春日井市が連携し、大学の持つ人材や技術、知の資産を活用して地域再生・地域活性化に取り組んできました。

一方、本研究所は例年、「生物機能開発研究所」との共催による「中部大学ライフサイエンスフォーラム」を開催し、生命・健康科学の進歩に関する最新の知見を提供しておりますが、本年度のフォーラムは、コロナ禍のため、Zoom 配信により行われました。

さて本年度の紀要には、総説 9 編、解説 2 編、研究報告 3 編、および生命健康科学研究所主催セミナー報告 1 編を収載しております。寄稿された方々には心より感謝いたします。

以上、本研究所の活動実績をふりかえってみますと、本研究所が生命健康科学部の研究推進の拠点となっていることを実感するとともに、今後の生命健康科学部の研究推進及び若手研究者・大学院生の育成と支援の場として貢献していくことが、研究所の重要な役割であることを痛感いたします。今後、本研究所がこれらの目標に沿った活動を行っていくために、皆様からの様々なご提案をお待ちしております。また、ご提案を実施に移していけるよう、ご協力よろしくお願い申し上げます。これらの諸活動の学内外への紹介・発信の一助とするために、この紀要がお役に立てば幸甚でございます。

今後も皆様のご助言と一層のご支援をいただきますようお願い申し上げます。